

論文名：妊娠糖尿病妊婦にむけた食生活適応尺度の開発 信頼性と妥当性の検討（要約）

新潟大学大学院保健学研究科

氏名 天谷 まり子

---

（背景と目的）

妊娠糖尿病妊婦の増加に反し、治療上重要な食事療法においても統合的・継続的ケアシステムがまだない。その一因として、妊娠糖尿病妊婦の食生活を本質的に捉えた客観的評価指標が乏しくケア前後の評価が難しいことが推察される。このような背景を鑑み、妊娠糖尿病妊婦が食事療法に適応し食生活の質が確保された状態を数量化し測定することができる尺度の開発が必要であるといえる。本研究は、妊娠糖尿病妊婦の食生活における適応状態を測る尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とした。

（方法）

はじめに、「妊娠糖尿病妊婦の食生活適応」の尺度原案を作成した。「妊娠糖尿病妊婦の食生活」における構成概念の明確化では、既存文献の研究結果をデータとし、その内容の類似性・相違性を分類し構成概念を明確にした。電子データベース（医学中央雑誌及び Pub Med）を使用し、キーワード“妊娠糖尿病”“食事療法”“質的研究”を掛け合わせ、2019年1月時点で過去10年以内を検索した。抽出した文献の中から選定基準をもとに文献を決定した。構成概念に基づきアイテムプールを作成した。アイテムを精選し、言葉の表現を統一・修正した質問項目案に集約した。質問項目案について、助産師あるいは看護師7名、管理栄養士2名、医師1名から、自記式質問紙調査または面談にて構成概念妥当性及び表面妥当性と内容妥当性について回答を得た。その結果を基に研究者間で協議し、最終的な質問項目44項目を決定し尺度原案とした。次に、尺度原案を用いて妊娠糖尿病妊婦を対象とし2020年1月～6月に予備調査を行ったうえで、2020年1月～2021年4月に本調査を実施した。本調査では、手渡しによる調査とWeb調査を行った。Web調査では、初回テストから3日以内に再テストを実施した。本調査で対象者235名のデータを基に項目分析と探索的因子分析、確認的因子分析を行った。再テストによる81名のデータで安定性を確認した。

（結果）

尺度原案の作成において、25文献（和文献11件、海外文献14件）を用いて「妊娠糖尿病妊婦の食生活」の構成概念を明確にした。「妊娠糖尿病妊婦の食生活」は、5つの概念【生活の中で食事療法を実践する】【心の健康を保つ】【家族の協力や社会の理解の中で食事療法を行う】【胎児の健康を守る】【将来の自分自身の健康を守る】で構成された。アイテムプールを作成後53項目の質問項目案に集約し、内容妥当性と表面妥当性を検討し尺度原案44項目の質問に決定した。

項目分析により選定した21項目を探索的因子分析した結果、2因子構造における14項目の質問項目が抽出された。2つの因子は、【妊娠糖尿病の食事療法の実践】と【妊娠糖尿病

妊婦の健康観】と命名した。信頼性について、Cronbach's  $\alpha$  係数は 0.906 であった。2 因子 14 項目の仮説モデルの適合度を確認的因子分析で検討し、探索的因子分析で最終的に採択した「妊娠糖尿病妊婦にむけた食生活適応尺度」の因子を潜在変数として分析を行った。2 因子を潜在変数とした場合の適合尺度は、GFI が 0.924、AGFI が 0.883 であり、RMSEA は 0.064 であり、0.085 未満の基準を満たしていた。潜在変数—観測変数間には全質問項目において 0.50 以上の妥当なパス係数が得られ、容認できる整合性を有していた。本調査における初回テストと再テストとの相関係数は 0.71 であり、時間的安定性を確認した。

妥当性について、基準関連妥当性の検討では、妊娠糖尿病の病状を表す基準として最新の HbA1c 値との相関係数は  $-0.092$  であった。さらに、構成概念妥当性では、本尺度と類似した SF-8 日本語版との相関係数は 0.039（身体的サマリースコア）及び 0.047（精神的サマリースコア）であった。

（考察と結論）

妊娠糖尿病妊婦にむけた食生活適応尺度を 14 項目 2 因子構造にて開発した。内的整合性と安定性の結果から高い信頼性が確認された。

今後は、基準関連妥当性と構成概念妥当性の検討を継続し、尺度の妥当性を確認する必要がある。そのうえで、本尺度の活用によって妊娠糖尿病妊婦の食生活適応状態を知ることができ、支援における情報共有に活かし総合的・継続的な支援に結びつけることができると考える。また、尺度によって客観性の保たれた情報に基づくケア効果の検証にも役立ち、証拠に基づくケア Evidence based medicine の実施にむけた研究の発展における可能性について示唆された。